《留学体験記》

ポストコロナの大学生活
—ハイデルベルク大学留学体験記—

田中　のえ

はじめに

古代ローマ帝国辺境に駐屯した軍に関して研究してきた私は、昨年の 9 月からドイツのハイデルベルク大学に留学中である。ハイデルベルクはドイツ南西部のバーデン・ヴュルテンベルク州に位置し、ライン川の支流であるネッカー川沿いにある都市で、ローマ帝国の国境をなしたとされるリメスもほど近くを通っている。学生はこの都市全体の人口の 4 分の 1 を占め[1]、街は常に若い世代で賑わっている。特にハイデルベルク大学の人文学系の学部や学科は、長い歩行者天国である中央通りを中心とした旧市街に点在しており、こうした学生たちの存在がハイデルベルクを特徴づけていると言っても過言ではない。

また、第 2 次世界大戦で大きな被害を受けずに残された歴史ある町並みと、中央通りの東端の高台にある城趾は、ドイツ国内だけでなく世界各地から多くの観光客を引き寄せている。中央通りを歩いているといろんな国の言葉が聞こえてくる。日本でもそれなりに人気な観光地のようで、80 歳近い京都の下宿先の大家さんにハイデルベルクに留学することを伝えたところ、昔、夫婦でネッカー川を船で下るツアーに参加し、その途中でハイデルベルクに寄ったことがあると写真を見せながら話してくれた。

そんなハイデルベルク大学の環境は、近くに鴨川が流れ、観光地の中にありつつも個性的で賑わいある学生街を持つ京都大学での学生生活と、何かと親和性がある。ただ、半年間生活する中で違いにも気付かされた。それは研究面以外の充実度である。私の個人的な印象だが、京都大学の学生生活では心配せずとも研究に充てる時間を十分に確保することができた。しかし、ここでの留学生としての生活は、研究以外の出会いの機会や文化交流の場も多いため、勉強時間を確保するにはそれなりにタイムマネジメントを頑張らないといけない。「しっかり勉強しつつ、日常生活も十分に楽しまなければならない」というのは私にとって新たな挑戦であった。

このような言い方をすると、京都での学生生活でこれまで何をしていたのだと、その頃から人との交流を積極的に行えばよかったではないかと思われるかもしれないが、これは私の努力不足という問題だけでもないように思う。何よりも 2019 年度に入学した私の学部時代の（最初の 1 年を除く）ほとんどが、コロナ禍による「自粛」に大きく影響を受けていたからだ。そのため、すべての「自粛」がなくなった状況で、人間関係も生活も一から作り上げるポストコロナの留学生活は、学部時代に経験できるはずだった活気に満ちた学生生活を、もう一度体験するチャンスを与えてくれているようである。そんな新鮮なハイデルベルクでの学生生活を通じて得た気付きをいくつか紹介しようと思う。

1.　はじめての実物

留学を始めてからの半年間で、私の研究にとって有意義な気付きの一つは「知っている」ことと実際に「体験する」ことに大きな隔たりがあるということだ。これまで家族旅行でヨーロッパを訪れたことは何度かあったが、コロナ禍による渡航制限もあり、西洋古代史を学ぶ学生としてヨーロッパに行くのは、この留学がはじめてであった。これまでは、渡航でき

[1] https://www.heidelberg.de/HD/Rathaus/Heidelberg+in+Zahlen.html (2024 年 4 月 1 日閲覧確認)

ないことを前提として、図書館やオンラインデータベースを通じて入手可能な一次史料や二次文献をベースに研究を進めていたため、研究上、そこまで不都合を感じることはなかった。しかし、ここに来て、あまりに当然のことで恐縮だが、やはり西洋古代史はヨーロッパや地中海周辺地域が経験した歴史であり、遠く離れた日本で知識として学んだものに加え、実際に目で見て触れる体験も欠かせないと強く思うようになった。

この冬学期に履修していた「パピルス学入門」は、パピルスを中心に碑文や木板文書など、西洋古代史を研究するにあたって重要な一次史料を取り扱う、この気付きのきっかけとなった講義である。講義はパピルス学の入門を謳うだけに、パピルスを文字史料として分析するだけでなく、その作り方や保存方法、デジタルアーカイブに至るまで幅広い観点から検討するものだった。私は、実際にパピルスや木板文書を手に取りながら分析することや、一次史料を物理的な素材として扱うことが初めてだったので、この講義が毎週の楽しみだった。

特に印象深かったのは、この講義で出されたある課題である。それは、受講生が Payri.info[2] というデジタルアーカイブに登録されているパピルスを一人一つずつ割り当てられ、そのパピルスのドイツ語訳をすでに出版されている研究書から探して、デジタルアーカイブに登録するというものだった。この講義を担当したロドニー・アスト先生はこのサイトの責任者の一人である。先生はユーモアのある方で、デジタルアーカイブにドイツ語訳を貼り付ける作業が自分たちだけではなかなか進まないからと、この課題を選んだ事情を正直に話していた。いずれにせよ、私としてはデジタルアーカイブの作成者や編集者側の世界の一端が見えたこの体験を通じ、単なるサイトの利用者として「知っている」状態から、ひとつ先のステップに進むことができたような気がした。

つい先日も、実体験の大事さに再び気付かされた。ハイデルベルク大学では 2 月と 3 月は講義のない時期であり、私はその休暇を利用して語学クラスで知り合った友人ら 8 人とおよそ一週間のイタリア旅行に出かけた。一週間の旅行のうち最初の数日をイタリア北部のボローニャやラヴェンナなどで過ごし、後半の 2 泊をヴェネツィアで過ごした。世界有数の観光地ヴェネツィアの迫力には確かに圧倒されたが、この旅行の中で私にとって最もインパクトがあったのはラヴェンナである。

ラヴェンナは人口 16 万人ほど[3]で、同程度の大きさのハイデルベルクに比べると少し廃れた雰囲気の小さな都市であるが、その旧市街には東ローマ皇帝ユスティニアヌスのモザイク壁画のあるサン・ヴィターレ聖堂がある。ユスティニアヌスは 6 世紀に東ローマ帝国の領土を一時的に大きく押し広げ、繁栄の時期をもたらしたとされる皇帝である。この聖堂およびモザイク画は初期ビザンツ建築を代表するもので、西洋古代史を専門とせずとも知っている人も多いだろう。私自身、このモザイク画をはじめて目にしたのは高校の世界史 B の授業だったように思う。

ユスティニアヌスはこのモザイク画の一番中心に、大司教や助祭、廷臣らはその両隣に随員として描かれて[4]おり、ユスティニアヌスが聖職者たちに対して高位にあることが明確に示されている。私はこのモザイク画がユスティニアヌスの権勢の象徴として、この聖堂の中心にドンと構えているのだろうなどと盲目的に考えていた。しかし、実際には、ユスティニアヌスはこの聖堂の主人公ではなかった。聖堂の天井の最も高く、目につくところにはイエスやそのモチーフである羊があり、ユスティニアヌスのモザイク画は祭壇の後ろの、覗きこもうとしない限り見えない側壁にあったのである。このモザイク画がユスティニアヌスのどのような意図を反映したものなのかは置いておくとして、世界史の資料集で見たモザイク画から思い込んでいた皇帝像と、実物として目にするモザイク画から得た印象はあまりにもかけ離れていた。

---

[2] https://papyri.info/ (2024 年 4 月 1 日閲覧確認)
[3] https://www.coe.int/en/web/interculturalcities/ravenna (2024 年 4 月 1 日閲覧確認)
[4] 越宏一「ラヴェンナの皇帝モザイク—造形原理的・発展史的考察—」『WASEDA RILAS JOURNAL』4 号、2016 年、245 頁。

取り上げたエピソードはごく些細なものだが、この留学生活を通じてローマ帝国のかつての支配域に実際にいるからこそ得られる気付きがある。この 6 月には藤井崇先生のご紹介でアッピア街道の発掘調査に参加する予定であり、他にもいくつか地中海方面への旅行を計画している。残り半年、どのような実物との出会いが私を待ち受けているのか楽しみである。

2. 歴史の痕跡

古代史という研究テーマから離れ、紹介したい気付きが一つある。それは、ハイデルベルクで暮らしていると第 2 次世界大戦の痕跡が日常のあちこちに垣間見えることである。それに気付かされたのは大学の語学コースの一環で、マンハイム・ハイデルベルク国際映画祭のイベントに参加したときのことだ。この映画祭は、ドイツではベルリン国際映画祭に次いで知名度のある国際映画祭であり、ハリウッド映画のような世界的映画ではなく、長編映画の経験の浅い若手監督の作品を選んで上映している[5]。そのため、観客と監督との距離も近く、映画を視聴した後には監督に直接質問したり、イベントで直接話しかけたりすることもできた。この映画祭の映画やイベントは一つ一つが特筆に値するが、ここでは割愛する[6]。

この映画祭で特に印象に残っているのは、総監督ザシャ・カイルホルツ氏がオープニングセレモニーで語った言葉である。彼は第 2 次世界大戦の歴史に触れ、現在のウクライナ情勢やイスラエル・パレスチナで激化する対立に対して「ドイツ人として」断固として立ち向かうべきだと明言した。ドイツの、未だに爪痕を残す戦争加害国としての過去とその過去に対する強い批判、そして、世界情勢を映し出す鏡のような移民国家としての現在がその言葉には詰まっていた。彼はその後、授業のゲストスピーカーとして招待された際にも、上映する映は、なるべく多様な国と地域から、そして映画のストーリーと並行して政治的・社会的なメッセージを伝えることのできる作品を選ぶように心がけていると、現在のドイツの政治情勢に触れながら話していた。映画祭のオープニングセレモニーという華々しい場面でもあえて負の歴史に言及し、公の場で政治的立場を表明することに臆することのない、カイルホルツ氏の率直な姿勢は、大戦の記憶が薄れつつある時代を生きる者として何かと考えさせられるものがあった。

映画祭の最後の授賞式が行われた、Karlstorbahnhof というイベント会場も、歴史的観点から興味深い。授賞式でのある来賓の言葉によると、この会場がある土地はかつて米軍基地であり、現在は地域コミュニティに文化的貢献をする場として利用されるようになったようだ[7]。彼は、かつての戦争を思い起こさせる場が、今では平和な催し物のために使われていることへの喜びを語った。ハイデルベルクの南部にはこの文化施設の他にも第 2 次世界大戦後に駐屯した米軍の基地や兵舎の跡が残されている。例えばハイデルベルク大学の学生寮ホルバインリング寮もその一つである[8]。その寮に住む友人によると、まだアメリカ式のコンセントの差込口が残っていることもあるらしい。このような大戦後にドイツに駐留した軍の施設の、民間ないし行政機関による転用は決して珍しくないようで、私が訪れたドイ

---

[5] https://www.iffmh.de/das-sind-wir/unser-selbstverstaendnis/index_ger.html (2024 年 4 月 1 日閲覧確認)

[6] この語学コースに参加した（私を含む）受講生の映画祭の上映作品およびイベントの感想は以下のサイトにまとめられている。https://unserfilmfestival.blogspot.com/ (2024 年 4 月 1 日閲覧確認)

[7] Karlstorbahnhof の歴史とその米軍との関連は以下のサイトでも確認できた。https://www.karlstorbahnhof.de/news/geschichte-und-geschichten-eine-historische-aufarbeitung-der-vorgeschichte-des-neuen-karlstorbahnhofs/ (2024 年 4 月 1 日閲覧確認)

[8] https://www.ruprecht.de/2014/01/29/us-flaechen-im-wandel/ (2024 年 4 月 1 日閲覧確認)

ツの他の町でもたびたび同様の話を耳にした。

大戦の記憶を呼び起こすのは映画祭だけではない。ハイデルベルクの大通りを少し外れたところに、Dokumentations- und Kulturzentrum Deutscher Sinti und Roma という名の、世界で唯一ナチス統治下におけるシンティとロマの迫害を扱う資料・文化会館がある。私も一度訪れたが、犠牲者一人一人の個人の物語を大きな迫害の歴史と並行して展示していて、日常を奪われた犠牲者のことを思うと万感胸に迫るものがあった。また、私が授業のために度々利用する Seminar für Alte Geschichte und Epigraphik（通称 : SAGE）の建物のすぐ近くには、Alter Synagogenplatz と呼ばれる、1938 年 11 月 10 日の放火により破壊されたシナゴーグの跡地がある[9]。11 月頃に通りかかると、そこにはろうそくの灯りの中に手向けられた多くの花束と祈る人々の姿が見えた。

私が日常の中で特に大戦の記憶を想起させられるのは、彼の有名な Stolpersteine（躓きの石）である。私は、買い物やちょっとした外出で Stolpersteine を目にすると、胸がぎゅっと締め付けられる気持ちになる。古代史では石碑などのモニュメントが、どのような空間や対象に向けられたかが重要な分析要素となるが、Stolpersteine はあらゆる人々の何気ない日々のあちこちで負の歴史を意識させてくるという点で、戦争の風化防止に効果的なモニュメントの利用だということを、毎日身を持って実感している。

ハイデルベルクには第 2 次世界大戦の痕跡があちこちに散らばっている。それは資料館などと違い、積極的に戦争について考えていない日常においても、負の記憶を呼び起こしてくる。ふと、こうした大戦の痕跡に気付くと、過去への反省の念や犠牲者への弔いの気持ちと同時に、今平和を享受できていることの有り難さが身に沁みる。ドイツと同じく戦争の加害国としての歴史を辿った日本にも戦争を慰霊する記念碑や資料館はいくつもある。ただ、それは被害の特に大きかった地域などに多く、戦争で直接的な被害を受けなかった、ハイデルベルクのような町で日常的に目にする痕跡とはまた位置づけが異なる。むしろ日本で大戦の記憶を想起するのは特別な機会や場所においてであり、求めている人でないとなかなか巡り合うことが難しい。過去への強い批判と反省を含むドイツの歴史語りは、イデオロギーに傾く可能性を常にはらんでいる。しかし、その歴史を特別なものとして扱わないからこそ、カイルホルツ氏のように祭典で負の歴史についてオープンに語ることができる環境が整うのかもしれない。

おわりに

ポストコロナの留学生活は、私の研究対象である西洋史を経験した地域に実際に住み、体験することによって、いくつもの新鮮な気付きと思索に耽る機会を与えてくれている。ここまで、ハイデルベルクでの大学生活を肯定的に語りすぎたあまり、ナイーヴな印象を与えたかもしれないが、その充実感が京都大学で研究してきた基盤に支えられていることを忘れてはいない。例えば、コロナ禍の間にオンラインでのやり取りが進んだことは、京都大学とのつながりを保ったまま留学生活を送れるという点で私にとって有り難い変化であった。

また、ハイデルベルクでの学生生活が京都でのそれよりも格段に不都合が多いことも事実である。語学の壁は勿論のこと、アジア人としてドイツに生きることは必ずしも楽しいことばかりではない。昨年の 10 月から徐々に日照時間が短くなる中、どんどん進んでいくドイツ語での講義と映画祭をはじめとした各種のイベント、慣れない環境でのはじめての論説の執筆が重なり、息つく暇もなくなった時には、憂鬱な気分に押し潰されそうになったこともある。

[9] https://www.heidelberg-marketing.de/poi/synagogenplatz (2024 年 4 月 1 日閲覧確認)

しかしそれでも、そうしたしんどさ以上に、コロナ禍が過ぎ去り、制限なく実際になんでも体験できるということや、今まで当然と思っていた価値観や文化から離れて、いろいろな人と交流できるということの喜び、そしてそこから得られる学びが私の活力となっている。

（京都大学大学院修士課程）